

日意（泰芸）所伝の天台学

渡 辺 麻 里 子

はじめに

天台宗の談義所に学んだ日蓮宗の学僧は数多いが、小稿では、日意（泰芸）に注目する。円教院日意（一四四四～一五一九）^①は、もと天台僧で名を泰芸といい、比叡山、近江国柏原成菩提院、武蔵国金鑽談義所^②、若狭国小浜普門寺などの寺院で学んだ。その後、日朝のもとで日蓮宗に改宗し、名も泰芸から日意と改めた。文明九年（一四七七）には、京都一条尻切屋町に妙伝寺を開創する。明応八年（一四九九）、日朝を継いで身延山久遠寺第十二世となり、永正十六年（二五一九）二月三日に七十六歳で入寂した。

注目すべきは、日意（泰芸）は武蔵国金鑽談義所において、金鑽第七世栄源に、「唯授一人」の恵心流三重相伝を伝授されていることである。つまり日意は、金鑽談義所が伝える学問の全てを学んだ可能性が考えられるのである。近年桑名貫正氏によって日意の事跡が詳しく紹介され、さらには「身延

文庫典籍目録」^⑥の刊行によって、日意など、多くの日蓮宗の学僧たちが天台宗の談義所に学び、持ち帰った天台関係聖教が、身延山久遠寺（身延文庫）に数多く遺されていることが明らかになった。小稿では、身延文庫に所蔵される日意の泰芸（天台僧）時代の書写本から、金鑽での伝受、ひいては中世の関東天台の談義所で行われていた学問の様相を照射してみたい。

一、金鑽談義所と泰芸

武蔵国金鑽談義所は、鎌倉中期に豪海の中興によって発展、武蔵国川越仙波北院と下野国長沼宗光寺と合わせて、関東の三談所と並び称された名高い談義所である。泰芸は、文明二年（一四七〇）二十七歳の時には、金鑽談義所第七世栄源に師事していることが確認できる。まずは金鑽時代の泰芸の伝受について、年ごとに追ってみる。

文明二年（一四七〇）、泰芸は、正月十日に『師資』（天台

4・1⁽⁷⁾」を授かった後、六月には、『初発真住抄(伊賀抄 教重)』(B 63)を金鑽宮談所一乗院で書写する。『伊賀抄』は、宏海の時に金鑽談義所に取り下され、関東では金鑽で学ぶことが出来たと考えられる書である。十月十四日から月末までは、『一流相伝法門私見聞(初度)』(B 44)の伝受が行われた。⁽⁹⁾この年は、恵心流三重相伝の初重(「初度、教重」)を受けたことになる。

明くる文明三年、泰芸は、前年十一月二十六日から始めた『宗要集要文』(B 43)の書写を、三月十一日に終える。六月十二日には、榮源所持の『法命集』(台疏3・7)を、七月十七日には、『摩訶止観大綱見聞』(B 64)を書写する。さらに八月十三日には『法華疏記第一大綱見聞』(台見4・29)を、八月三日から十月七日にかけては、金鑽寺仏乗房にて『雑々抄』九冊(B 65)を、十月二十八日には、『恵心流内証相承法門集(教重)』(B 39)を書写した。

八月二日・三日には、恵心流三重相伝の第二重(「行重」)を受ける。二日、泰芸は『第二重私聞書』(台口2・25)を書写する。翌三日には、『塔中口授』(B 53)、『二秘聞書』(B 50)、『中行伝』(B 68)、『中行伝抄』(B 69)の伝授が行われた。『塔中口授』は、第二重相伝の内容を知ることのできる貴重な文献である。この年は、天台諸文献の書写に努めると共に、前年の初重の相伝に続いて第二重の相伝を受けたので

ある。

文明四年、泰芸は、二月十九日に、『一流相伝法門私見聞(第二度)』(B 48)の書写を終え、四月、金鑽談義所の祭礼檀古の時に、『被接義私鈔』(B 12)を類聚した。そして四月十一日には、いよいよ第三重(「証重」、唯授一人の相伝『深秘見聞』(B 51)を伝授される。⁽¹⁰⁾「重授口伝」(C 12)の奥書には、泰芸の志の深さや、伊勢桑名という遠方より来たことに感じて三重相伝を授けたという、榮源の言葉が記されている。

泰芸の天台僧時代の事跡は、管見の限り、文明四年四月が最後である。翌年、四月二十九日に書写した『懐中隨身抄』(B 49)には、「久遠寺門人日意」と署名し、以降は「日意」と記して「泰芸」の名を用いることはなかった。身延山に登り、日朝のもとで日蓮宗に改宗したのは、この間のことと考えられる。⁽¹²⁾

金鑽時代に泰芸が相伝した諸書からは、初重から二重、三重と重ねていく恵心流相伝の伝受過程が明らかにされる。また同時に、『法華経』や天台三大部、論義関係書目など諸書の伝受が平行して進められていることも確認できるのである。

二、泰芸所伝の天台学

泰芸書写本には、金鑽のみならず、柏原成菩提院や小浜普門寺で書写したもの、年次や場所が不明なものも含まれてい

る。そこでそれらの諸書を合わせて『渋谷目録』⁽¹³⁾を参照しつつ分類してみると、第一に『法華經』と天台三大部關係、第二に論義關係、第三に口伝法門關係に集中することがわかる。

それぞれ確認しておく、第一に、『法華經』及び天台三大部關係では、『法命集』⁽¹⁴⁾『初発真住抄』『摩訶止観大綱私見聞』『法華疏記第一大綱私見聞』、『三百条』(B 61)、『玄義第一私見聞』(B 57)、『心地教行決』(B 60)等がある。

第二に、論義關係では、『被接義私鈔』『宗要集要文』、『雑々抄』『雑々私用抄』(B 66)、『雑々私聞抄』(B 67)、『十如是義』(B 71)、『天台雑々鈔名目』(B 73)、『宗要集私抄』(B 74)、『宗要集私案立』(C 9)等がある。

第三に、口伝法門關係では、『恵心流内証相承法門集』『一流相伝法門私見聞(初度)』『一流相伝法門私見聞(第二度)』『二秘聞書』『深秘見聞』『第二重私聞書』『塔中口授』『中行伝』『中行伝抄』『重授口伝』の他に、『大綱深義抄(七百科)』(B 40)、『一流相伝法門私見聞』(B 45)、『一流相伝法門私見聞』(B 46)、『一流相伝法門私見聞』(B 47)、『宗大事口伝抄(等海)』(B 55)、『伝授鈔条目』(B 56)等がある。その他、顕教血脉に類する『師資』、教義部に類する『要法文』(B 58)等がある。

なお以上の書目は、身延文庫所蔵の現存書目から挙げたものであるが、日意の『蔵書目録』(B 2)には、『台家聖教

日意所持分』として、他にも多くの天台聖教が挙げられている。その中には「於金鑽」と記され、金鑽での相伝と思われる『名目私見聞』四帖、『玄義略大綱私見聞』四帖、『文句略大綱私見聞』三帖、『止観略大綱私見聞』三帖、『玄義第一第二第八私見聞』四帖、等も見える。この目録中には、現在の身延文庫本には確認できない書目も多く、注目される。

おわりに

身延文庫に所蔵される泰芸(日意)關係書目から、金鑽談義所における相伝、及び、天台談義所における学問の伝受について検討した。泰芸は、金鑽談義所において第三重・唯授一人の相伝を受けた学僧である。泰芸の伝授された本によつて、恵心流口伝法門三重相伝の伝受の様相が具体的に明らかとなり、また口伝法門以外の諸書の伝受もうかがえた。今後は内容の精査により、更なる検討を行いたい。

泰芸の場合は、伝授された文献は身延山久遠寺(身延文庫)に多く遺された。泰芸に限らず、日蓮宗の学僧で天台宗の談義所に学んだ者は多く、書写して持ち帰った天台關係の聖教類が日蓮宗寺院に遺されることは多い。日蓮宗寺院の聖教は、関東天台の学問を考える貴重な知見を与えてくれる。今後一層の調査検討が要されるのである。

- 1 日意の伝については、桑名貫正「開山円教院日意上人伝」(『本山妙傳寺資料鑑』本山妙傳寺、一九九六年)、同「身延山十二世円教院日意上人伝に関する二、三の問題について」(『身延論叢』二、一九九七年三月)に極めて詳細に記され、大いに知見を得た。
 - 2 寂照山円乗寺成菩提院。現在滋賀県米原市に所在。泰芸は、中興三世春海の弟子。成菩提院藏『春海弟子分交名』(『聖教』・2)の応仁元年(一四六七)八月二十七日条に泰芸の名が記される。この年、春海は六十五歳。泰芸は成菩提院にて『一流相伝法門見聞』二巻を書写した。
 - 3 金鑽山大光普照寺。現在埼玉県児玉町に所在。聖徳太子の開創、慈覚大師の再興と伝える。
 - 4 文明二年(一四七〇)七月十一日、普門寺にて『十如是義』上巻を書写した。
 - 5 前掲注(一)。
 - 6 『身延文庫典籍目録』上中下(身延山久遠寺、二〇〇三年・二〇〇五年)。身延文庫については、室住一妙『身延文庫略沿革』(身延山久遠寺、一九四一年)に詳しい。
 - 7 書名の下の()内の番号は身延文庫の所蔵番号。ABCは、『歴代十二世日意』を略す。以下同じ。
 - 8 康暦二年(一三八〇)以前。『正統天台宗全書目録解題』一五四頁参照。
 - 9 伝授の完了は『法華天台宗恵心流内証相承法門目録』及び『竊検天台法華宗相承師師血脉譜』(『本山妙傳寺資料鑑』八一頁・八四頁)による。
 - 10 本書については、荒瀬純隆「東陽領之書『深秘見聞 証重唯授一人』について」(平安仏教学会学会術大会口頭発表、二〇〇四年二月一日)に詳しく、発表資料を参照させていた。
 - 11 伊勢桑名妙蓮寺。泰芸の日蓮宗改宗に伴い、天台宗妙蓮寺は日蓮宗寿量寺となった。
 - 12 日祐『勢州桑名妙延山寿量寺記』(慶長十五年(一六一〇)、立正大学日蓮教学研究部所紙焼写真を拝見。都守基一氏御示教)や日潮『本化別頭仏祖統紀』第一四(享保十六年(一七三二))、『日蓮宗全書』所収)は、改宗を文明元年のこととする。本稿では、桑名氏の見解に従い、改宗は文明五年と考える。
 - 13 渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』、法蔵館、一九七八年。
 - 14 既出の書目は所蔵番号を略した。以下同じ。
- (付記)
- 貴重な御本の閲覧に際し、身延山久遠寺ならびに身延文庫の皆様方には御厚誼を賜りました。心より御礼申し上げます。
- (キーワード) 日意、泰芸、金鑽、栄源、三重相伝
(早稲田大学大学院博士課程修了)

that the postulation of “no teaching” precludes the cause for becoming a buddha and that, without that cause, this explanation resembles heretical, non-Buddhist teachings. Genshin questioned Zhili’s approach to this problem, and many Japanese Tendai masters agreed with Genshin’s interpretation.

120. The Tendai Learning Transmitted through Nichii (a.k.a. Taigei)

Mariko WATANABE

Many scholar monks of the Nichiren sect studied in *dangisho* (doctrinal studies centers or workshops within the Buddhist temple establishment) of the Tendai sect. Hence many of the documents copied at these centers of learning have been preserved at temples of Nichiren sect affiliation, to the extent that the learning conducted at Tendai *dangisho* can be gleaned from Nichiren sect temple documents.

This paper concerns the monk Nichii (1444-1519) who first took the tonsure in the Tendai sect under the name Taigei, studying at *dangisho* at Hiei-zan, Jôbodaiin temple, Kanasana temple, and elsewhere. He later converted to the Nichiren sect under the guidance of Nitchô, changing his name to Nichii, and eventually became the twelfth generation abbot of Kuonji Temple, the main temple of the Nichiren sect.

While still affiliated with the Tendai sect and using the name Taigei, Nichii was chosen to be the one monk initiated into the exclusive three stage transmission at the *dangisho* conducted by Eigen, seventh generation abbot of Kanasana Temple. Thus we can presume that he fully absorbed the learning conducted at Kanasana Temple, and, through studying the surviving documents that he copied as Taigei, we can discern the outlines of the scholarship transmitted there during the fifteenth and sixteenth centuries. Many of these documents have been preserved at Kuonji Temple in the Minobu Archive, enabling scholars to identify the chronology, order, and content of initiation at Kanasana Temple. We can also see that the Lotus Sutra, documents related to The Three Great Treatises of the Tendai School (Sandaibu), works

concerning doctrinal debate, and those concerning oral transmission were part of the “textbooks” that Nichii copied during his transmission studies.

121. DAIHOU Syudatsu's Interpretation of “one's own mind”

Zhe-yi PAN

To obtain the truth of Buddha, Tiantai Zhiyi 天台智顗 teaches that it's fine to meditate on one's own mind which is easy to be meditated on. But it tends to understand this teaching too easily from old times. In this essay, the most successful one in Tiantai study of Japan - DAIHOU Syudatsu (1804~1884)'s discussion over this problem is taken up, and the traditional comments and their limits are examined. Syudatsu centered on Zhanran 湛然 and Zhili 知禮, settled the traditional comments of Zhiyi's teaching in two meanings - “Jinyao 近要” and “Mingmiao 冥妙”. “Jinyao” means “Jinyuan 近遠” and “Nengzao 能造” of one's own mind. “Mingmiao” means that one's own mind really does exist but without a form. These two meanings are taken to be complementary to each other, and because both are the dharma of mind, they also contain each other.

122. Attaining Buddhahood by Small Virtue and Threefold Buddha-nature

Ryūkō KATSUNO

In the Lotus Sūtra, there is a story of a child who playfully built a Buddhist stupa but attained Buddhahood by chanting Namu Buddha only once with a confused mind. This is called an incident of small virtue attaining Buddhahood. Tiantai considers this story as an important one since it candidly shows the Lotus Sūtra's concept of the Truth of the One Vehicle. Tiantai thinks of behaviors of playfulness and confusion in mind as characteristics of human goodness, explaining the episode of small virtue attaining Buddhahood by the theory of Threefold Buddha-nature. The small virtue is Buddha-nature as conditional cause in Threefold Buddha-nature. Tiantai explains that Buddha-nature as complete cause also moves and Buddha-nature